

第39回日本臨床皮膚科医会総会・ 臨床学術大会を開催して

(2023年6月17・18日)

※ロイトン札幌とWeb配信のハイブリッド開催

藤田 靖幸

市立札幌病院皮膚科医長

はじめに

第39回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会を札幌で開催いたしました(図1)。感染症対策をどこまで行うか先のみえない中での準備でしたが、2023年5月8日に晴れて新型コロナウイルス感染症が第5類に移行し、目にみえる感染爆発もおこらず、現地参加しやすいタイミングでの開催になりました。最終的には参加登録者数1,628人中1,041人もの方が現地参加され、少し暑めの北海道を堪能していただきました。

テーマ

今回は「新時代への飛躍」をテーマにしました。この言葉には、2つの意味を込めています。1つ目は、新型コロナウイルス感染症が世界中を襲い、そして人類がさまざまな工夫をもって乗り越えつつある中で、新しい世界を迎えようという思いです。たとえばオンライン配信によって学会参加のハードルが低くなったのは、コロナ禍がもたらした数少ないメリットの1つです。その点を損ねないように、ハイブリッド開催+オンデマンド配信は最初から決定事項でした。



図1 大会役員の集合写真

テーマに込めた2つ目の意味は、この数年で急激に進歩している各種治療薬、そして世代交代が進む日本の皮膚科学を象徴したいという思いです。とくに臨床の場で、上司が若手へ参加を勧めたくなるような内容を意識しながら、各シンポジウムや企画を進めました。

プログラム

道内3大学の頭脳を結集させたプログラム委員会により、臨床実地に即したシンポジウムが30本企画されました。宮内俊次先生(宮内皮膚科クリニック)には、ご講演に合わせてご自身の著書『皮膚科昆虫記』を改訂いただき、参加者へ配布してくださり大好評でした。アナライザーを活用した聴衆参加型のセッションもたいへん賑わいました。特別講演では、北海道に縁のある秋山真志先生(名古屋大学教授)、2022年日本医師会会長に就任された松本吉郎先生、厚生労働省保険局医療課の橋本尚英先生に、それぞれ臨床医に“刺さる”お話を賜りました。

一般演題は78題の登録があり、優秀な演題については公益財団法人マルホ・高木皮膚科振興財団協賛によるポスター賞が贈られました。演題に応募して下さった先生方に心から御礼申し上げます。また、受賞された先生方、おめでとうございます。

特別企画として、日本臨床皮膚科医会雑誌の人気コーナー「なにこれ?」「へえ～」から、とくに臨床的意義の高い症例をセレクトして展示し、併せて実行委員が経験した「なにこれ?」な症例の賞品付きクイズも企画しました。そして、皮膚疾患に関連する全国各地の患者会に声をかけ、ポスターやブースを展示いたしました(図2)。お陰様でポスター22団体、ブースは9団体の応募をいただき、お互いに新しい発見ができる機会となりました。

お楽しみ

文化講演では、2022北京五輪女子カーリング銀メダリストのロコ・ソラーレの皆様、コミュニケーションが産むチーム力の育み方についてお話いただきました。たいへん盛況で、会場で配布したロコ・



図2 患者会紹介ブース



図3 会頭肝いり企画やきそば弁当のコーナー。予想外の人気でした。

ソラーレグッズは一瞬でなくなっていました。

コロナ禍の影響が見通せなかったため会期中の懇親会開催は断念し、その代わりカジュアルな飲食コーナーを1日目の夜に設けました。運営側の予想を遙かに超える人数の先生方が楽しまれ、久しぶりのリアル懇親会の雰囲気味わうことができました。

そのほか、北海道名物やきそば弁当やお菓子類を揃えた休憩コーナー、地元企業によるお土産のノート配布や書籍コーナーなど、地域色を感じてもらえる運営を心がけました(図3)。

おわりに

全体として非常に盛会に終えることができたのは、各委員や座長・演者の先生方、そして学会事務局の皆様のおかげです。関係各位に心より感謝申し上げます。